

八代將軍

吉宗

中

ジエームス三木

八代將軍

吉宗

中

ナームス三木

小説
吉宗
中

1995年 4 月25日 第 1 刷発行

1995年 6 月15日 第10刷発行

〈検印廃止〉

著 者 ジェームス三木

発 行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1 郵便番号150-81

電話番号03-3464-7311

振替 00110-1-49701

印刷・製本 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

図<日本複写権センター委託出版物>

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、
著作権侵害となります。

©1995 James Miki

Printed in Japan

ISBN4-14-005201-5 C0093

八
公
格
軍

吉
宗

田

目次

星の囁き

5

報復人事

25

名君づくり

45

論争の鬼

66

將軍は四歳

83

裏工作

102

江島生島

121

男の花道

139

へその曲げ方

159

切干し大根

178

美女お断り

198

大岡越前

218

中間管理職

237

お庭番

255

勸農抑商

274

目安箱

291

心中禁止令

309

題字
仲代達矢

装幀
乾 英彦

協力
N H K

星の囁き

宝永四年（一七〇七）十一月二十三日、富士山の大噴火が起きた。新井白石は回顧録『折たく柴の記』に、その模様を詳しく書いてるので、おおまかに引用しておく。

「昨夜、大きな地震がござり、この日正午には、雷のごとき音が聞こえ申した。登城の折りは雪が降り出し、よく見れば雪にはあらず、白い灰でござった。西南の空に黒雲が湧き起こり、稲妻らしきものが、しきりに光り申した。西の丸にたどりつくころは、白い灰が地面を覆い、草木もすべて真っ白でござった。夜にはまた地震がござり、大地がぐらぐら揺らぎ申した。これが富士山の噴火と知ったのは、三日目のこととござる。その後、十二月の初めまで灰が降りつづけ、人々はみな咳に悩まされ申した」

江戸百万の町民は、どんなに驚いたことだろうか。天地鳴動して、昼でも真っ暗な空から、おびただしい灰が降ってきたのだ。何日たっても地震がつづき、灰は降りやまず、生きた心地がしなかったと思われる。

武蔵、相模、駿河の三国は、灰どころではない。おびただしい土砂に、野も山も田畑も覆われ、その災害は計り知れなかった。やがて富士山の山腹には、火口の周りに新しい峯が盛り上

がり、これは後に宝永山ほうえいざんと名付けられた。

度重なる天変地異に、氣も顛倒した將軍綱吉は、名僧の普れ高い伝通院祐天でんつういんゆうてんに、事の吉凶を占わせた。

「およそ地にあるはずの砂が、天より降るは尋常ならず。鳥獸のために人を殺すも、同様に尋常ならず」

祐天は生類憐れみの令を批判し、暗に將軍の退陣を求めたのである。

「世にも憎々しい物言いじゃ。わしがもつと若ければ、その場で手打ちにいたすところであつた」

綱吉は御台所信子みだいどころのぶこに愚痴をこぼした。

「さすがは菌きんに衣着せぬ伝通院殿、どうかお咎めなきように——」

「わしはそれほど狭量ではない。忌ま忌ましいが褒美をくれてやった」

「それはようござりました」

綱吉は激しく咳き込んだ。その背中を信子がなでさすった。

「家宣殿いえのぶはすでに四十六歳、今が働き盛りかと存じます」

「だからどうした——」

「老中たちも若返り、もはや後顧の憂いはござりますまい」

「すると、そちは何か、わしに隠居せよと、かように申しておるのか？」

「ものごとには汐時がござります。家康公のひそみに倣い、大御所として將軍をお導きなされませ」

「誰の入れ智恵じゃ」

「入れ智恵ではござりませぬ。私の一存にて申し上げております」

「黙れ！ 家宣はひよっこじや。国難かくもきびしき折りに、天下をまかせられるか！」

「されば申し上げます。天下万民は上様の御隠居を、今か今かと待ち詫びております」

「聞き棄てならぬ」

「何とぞ晩節を汚すことなく、進退を明らかになされますように——」

「おのれまでもが——」

綱吉は真つ赤になった。信子は黙って綱吉を見つめた。

「かかる折りに隠居すれば、家千代が死んだのも、富士山が噴火したのも、すべてわしのせいになるではないか。ならぬならぬ。隠居などもつてのほかじや！」

綱吉はまた咳き込んだ。今度は信子も咳き込みはじめた。正面から綱吉に隠居を勧めたのは、信子と伝通院祐天だけであつた。

宝永五年（一七〇八）閏正月。

幕府は武蔵、相模、駿河三国の、土砂と灰を除去する作業に取り組み、諸大名に百石あたり

二両の抛出金を求めた。

これに真つ向から注文をつけたのは、紀伊吉宗よしむねであつた。吉宗は頼純よりずみを従えて、黒書院に乗り込んだ。同席したのは柳沢吉保やなぎざわよしやす、老中土屋政直つちやまさなお、勘定奉行荻原重秀おぎわらしげひでである。

「恐れながら紀州藩は、五十五万五千石にござりますれば、一万一千一百両の負担と相なりまします。すでに老中を通じてお届け申し上げたごとく、紀州は藩主の葬儀が相次ぎ、昨年は大地震と津波の災害をこうむり、多くの餓死者を出しております。かかる折りに一万両を超える上納金は、到底捻出したしかねます」

「ほう、値切りに参ったか」

「何とぞお慈悲によつて、減免の措置を賜りたく存じ奉ります」

綱吉は荻原重秀を見やった。

「勘定奉行いかに——」

「恐れながら紀州藩の御事情を承り、まことにお気の毒とは存じますが、当今はいずれの大名も財政の逼迫ひっぱくに喘いでおり、一藩を減免すれば、他の藩も次から次へ名乗り出るものと覚えます」

「何といおうと、ない袖は振れぬ」

吉宗は居直つた。重秀は角張つたエラを上下に動かした。

「武蔵、相模、駿河は壊滅の危機に瀕しております」

「その儀はとうに存じておる。だが天変地異は国の災難でござる。諸大名が助ける前に、幕府が助けるべきではないか」

吉保がこれを受けた。

「お言葉ながら、幕府の御金蔵も底をついております」

「これはしたり、金銀改鑄にて、六百万両をものしたと聞いておる」

「すでに使い果たしました」

「使い果たして上納金に頼るは、幕府の怠慢と心得る。国難に備えて備蓄を図るのが役人の才覚であらう」

吉宗は堂々と役人を批判した。綱吉は心地よきそうに聞いている。

「しかし、天から砂が降るとは、思いもよらぬ仕儀——」

吉保は矛先をかわそうとした。吉宗はすばりといったのけた。

「幕府は無駄金を使い過ぎる」

頼純が咳払いをした。土屋政直が控えめに注意した。

「上様の御前にござりまするぞ」

「苦しうない。今しばし吉宗の申し条に耳を傾けよ」

「かたじけのうござります」

吉宗は厚い胸をぐんと張り、風を孕はらんだ帆になった。

「紀州藩は、質素儉約を旨とし、家臣も領民も汗水流して財政の再建に努めております。されば今、一万両を抛出するは、腕をもぎとられるに等しく、家臣も領民もいちじるしく氣勢をそがれるに相違ござりませぬ。恐れながら減免の措置が叶わずば、一年間の猶予を賜りとう存じ奉ります」

重秀のエラが動いた。

「幕府とていたずらに手をこまねいてはおり申さず。こたびは大銭の鑄造に着手いたしており申す」

大銭は十文を一錢とする新貨幣である。

「は！ 幕府は気楽なものじゃ。困ったときはカネを作つて出目（利鞘）を稼ぐ」

「殿——」

たまらず頼純が制止した。吉宗は鷹のように両手を広げた。

「それがしの衣服を御覧あれ。表も裏もみな木綿じゃ」

吉保も重秀も絶句した。

「これが紀州の質素儉約でござる」

綱吉がほうと感心した。

「寒くはないか？」

「吉宗は武士にござります」

能はへたくそだが、見せ場をちゃんと心得ている。綱吉は目を細め、人払いを命じた。この威勢のいい若武者と、差向いで話したいといった。

「そちは、わしによう似ておる」

ふたりきりになると、綱吉は上段の間からちよこちよこ下りてきて、でんと坐った吉宗の周りを歩きはじめた。

「次々に兄が死んで、突然家督が転がりこんできた。これを天命と申すべきか、賽の目と申すべきか、いずれにしても思いもよらぬ仕儀であつた」

綱吉は手を後ろに組んで、首をぐるぐる回している。

「しかしな、將軍といえども治世はままならぬ。わしも若いうちは、そちと同じように氣骨があつた。たくさん夢を持っていた。それがひとつひとつ潰れ、氣がついてみると、すがすがしい武門の誉れは消え失せ、公卿^{くぎ}まがいの武士が、大手を振って歩くありさまじゃ。むろん、わしとて責めを負わねばなるまいがの。かかる風潮は、家宣の代になればますます強まろう。そこでじゃ、せめて紀州家だけでも、武門の誇りを守つて貰いたい。武士はかくあるべしと、身を以て示せ」

「お言葉、肝に銘じまする」

「あのな吉宗、ここだけの話じゃが、家宣はそれほど若くない。しかも嫡男^{ちやくなん}を挙げておらぬ。近い将来、將軍家の血が絶えぬともかぎらぬ。分かるか？ ひよつとすればひよつとするぞ」

「……………」

吉宗はぞくりとした。老いの執念というのか、まだ綱吉は、家宣の相続にわだかまりを持っているのだ。

「万が一、そちにお鉢が回れば、必ずわしの遺志を継いで貰いたい」

吉宗の全身は石になった。言葉を絞り出すのがやっとだった。

「恐れながら御三家の筆頭は、尾張家にござります」

「尾張はどうにもならぬ」

「は？」

「吉通は悪くないが、ほんじゆいん本寿院が阿呆じゃ。息子可愛さのあまり、家老どもと仲違いいたしてお

る。お家騒動の寸前じゃ」

「……………」

綱吉の真意が分からなかった。最高権力者の言葉を、誰かに聞いていて欲しかった。

「近う寄れ吉宗——」

六十三歳の孤独な老人は、自分から寄ってきて、吉宗の手をとった。大木に蟬せみがとまったような形になった。

「わしはの……そちのような息子が欲しかった」

かんだか甲高いが弱々しい声であった。吉宗は綱吉の瞳の中に、臨終のときの光貞みつさだを見た。去りゆく

者の哀切きわまりない心情が、そこはかとなく伝わってきた。

「大事ござらぬか？」

黒書院を退出して、松の廊下へ向かうと、頼純がふつとんできた。

「御前にてあのような物言いは、無礼にござりまするぞ。それがしは寿命の縮む思いをいたしました」

「御懸念無用、上様は話が分かる」

「それが油断のもとでござる」

「あのない叔父上——」

吉宗は扇子で口元を隠しながら、面談の結果を告げた。頼純は啞然となった。

藩邸に戻ると、水野重上らの重臣が雁首を揃えて待っていた。

「早速ながら申し上げます。抛出金捻出のため、家臣一同の知行を、禄高に応じて借り上げるほかに、殿の御裁断を仰ぎたく存じまするが——」

「やむを得まい」

「恐れながら十分の一の借り上げが相当かと心得まする」

「二十分の一でよい」

有馬氏倫が、げじげじ眉を寄せた。

「恐れながら二十分の一では、一万両に遠く及びませぬ」

頼純がにやりと笑った。

「驚くなかれ。殿は上様と直談判じかだんぱんに及び、抛出金を半額にして戴いた」

「何と——」

「わしも開いた口がふさがらぬ。殿はたいしたお方じゃ」

一座に悦びと疑念が錯綜さくそうした。重上は慎重に言葉を選んだ。

「上様は氣前のよい御氣性にて、しばしば空手形をお出しあそばします。その儀は御老中も御承知にござりましょうか」

「それはまだ分からぬ」

「後でお取消しと相なれば、それこそ一大事にござります」

「いやしくも時の將軍から出た言葉じゃ。もし偽りあらば、吉宗の面目にかけて、腕ずくでも承知させて見せようぞ」

赤鞘の脇差をポンと叩いた。

明るくてもの怖おそじせず、大胆に相手のふところへ飛び込む吉宗の性格は、功成り名遂げた年寄りに、おおむねウケがよかった。いわゆるジジイ殺しである。

花の三月——。

頼純が深刻な表情でやってきた。